

## 紹介

桃木至朗編

### 『海域アジア史研究入門』

海域アジア史とはもはや耳慣れたような言葉だが、そもそもそんなものが本当にありうるのだろうか。入門書が出るくらいだからあるに決まっている、と考える人も多いだろう。だが、今日の大学の専門課程に日本史専攻・東洋史専攻はあっても、海域アジア史専攻というものがどこかにあるということ、筆者は寡聞にして知らない。もともと、存在する全ての学問分野が専門課程を持つわけではないのだから、それ自体は怪しむに足りないのかも知れない。しかし、「海域アジア史」なる新分野が、日本史、中国史、ヴェトナム史といった既存の一国史へのアンチとして、そうした領域区分に異議を申し立てるべく自らを位置づけているとすればどうか。海域アジア史とは、本当に成立しうるのだろうか。

では、この「海域アジア」が指す対象と

は具体的に何だろう。注意すべきはこれが「アジア海域」ではないことである。本書総説に述べられているので繰り返さないが、決して「アジアの歴史」にとらわれたものではないらしい。では海か。しかし海域史はいわゆる自然科学とは別物で、そこには人間的活動がなければならぬ。ならば海をめぐって繰り広げられる人間の歴史ということだろう。確かにその通り。ただし、本書によればこれに加えて海を越えた陸上の国々の交渉の歴史も含むというから、これはもう際限があつてないようなものである。こうしてみると海域アジア史とはいわばグローバルヒストリーの片割れであり、大陸ユーラシア史とは二卵性双生児の關係にあることが分かる。「ひとつの世界」が叫ばれて久しい昨今、どちらの気焰も天を覆わんばかりである。

本書が対象とする時代は九世紀から一九世紀初頭までのおよそ一千年の長きにわたるが、地域は主として東アジア・東南アジアに限られている。三人の研究者による分担執筆で、そのうち半数を新進の若手が占める。内容はいたって手堅い概説的論述ないし研究状況の紹介を主調とするが、海

域史に全く縁のない読者も最新の研究成果を一通り通覧することができる。その意味でこの書は入門書であると同時に、「海域アジア史」が研究史上に自らを体系付け、一つのオーソリティを打ち立てようとする「海域アジア史宣言」だといえる。

筆者は標題の「海域アジア史」にあまりにこだわりすぎたかも知れない。同書の執筆者たちの個々の世界像は必ずしも単一ではないし、あるいはそうした歴史観の統一という発想自体も今後は考え直されねばならないだろう。見どころといえるのは、それぞれ外交や貿易に関わる研究でそれなりの業績をあげてきた個々の執筆者が、それぞれが培ってきた見地からどれだけ魅力的な世界像を打ち出しているかということに尽きる。

本書は、巻頭に桃木至朗・山内晋次・藤田加代子・蓮田隆志らの連名で総説が附され、理論的な位置づけはおおむね尽くされている。本論の内容は大きく「通時的パースペクティブ」と「各論」に二分される。

前者はさらに、第Ⅰ部中世（九世紀—十四世紀前半）・第Ⅱ部近世前期（十四世紀後半—十七世紀初頭）・第Ⅲ部近世後期（一

七世紀中葉―一九世紀初頭）の三期に区分され、時代と領域を分けた一七章の論説が並ぶ。「各論」には、それぞれ互市貿易・港市社会・貿易陶磁・海産物交易・造船技術・航海神・漂流・文献史料等の個別テーマを扱う各章が立てられる。巻末には本文中で言及された日・中・韓・欧諸語の文献目録（韓国語のものはごくわずかだが）を附し、工具書としても有用なものである。日本史・東洋史・経済史を選ばず、議論の幅を国境の外へと広げたい研究者の恰好の手引きとなることだろう。「宣言」はひとまず成功を収めたものというべきか。

（A5判 三〇二頁 二〇〇八年三月）

岩波書店 一九四〇円）

（山崎岳 京都大学人文科学研究所助教）